

稀有ナル適應ノモトニ施セシ帝王切開術實驗二例

岡山醫學專門學校產婦人科教室

岡山醫學士 秋 本 運 晃

帝王切開術トハ妊娠子宮ヲ切開シ此ノ人工の産道ヨリ胎兒ヲ挽出セシムル法ナリ。

泰西ニ於テ帝王切開術ノ由來ハ甚ダ遠キ太古ニアリ、而シテ往時ニ行ハレシ帝王切開術ハ主トシテ瀕死ノ狀態ニアルカ、又ハ既ニ死亡セル產婦ニ對シテ施行セラレタリ、紀元前七百年頃ニ存在セシ羅馬法典中ニ、「死妊婦ハ豫メ腹部切開ニヨリ胎兒ヲ取り出スニ非ザレバ埋葬スルコトヲ得ズ」トノ規定アリ、是等ノ事實ヨリ帝王切開術ノ行ハレタルハ既ニ甚ダシキ太古ニ始レルコトヲ推知シ得ベシ、而シテ生體ニ本手術ヲ行ハレシヤ否ヤ疑問ナリ、少クモ今日吾人が多クノ場合目的トセル妊婦竝ニ胎兒ノ生命ヲ救濟センガ爲メ行ハレツ、アル者トハ異レルガ如シ。

生體ニ帝王切開術ヲ行ヒタル第一人者ハ外科醫トラウトマン (Jarenius Trautman) ニシテ氏ハ千六百十年四月二十一日「ウイッテンベルヒ」ニ於テ妊娠「ヘルニア」(Hernia ut. gravidi)ノ一例ニ之ヲ行ヒ居レリ、其後ポロー (Porro) ゼンゲル (Saenger) 等ノ諸大家ヲ經テ現時ノ發達ヲ見ルニ至レリ。

我が國ニ於テハ太古帝王切開術ノ圖譜ニ殘サレタル者アルモ何人ニヨリ行ハレシカ不明ナリ、嘉永五年壬子四月二十五日伊古田純道氏ガ上野國綠野郡我野正丸ニテ農夫常七妻(三十三歲)ニ行ヒタルガ嚙矢ナルガ如シ、當時ニ於ケル伊古田氏ノ診斷竝ニ手術記事ヲ見ルニ、「頭大ニシテ左方ノ手足臍帶ト共ニ陰門ニ臨ム鬪轉術ヲ以テ此ヲ移動セントスルニ堅牢確乎トシテ抜ク可ラズ尙ホ一二他術ヲ施スト雖モ寸效ナシ遂ニ腦骨ヲ碎キタルモ效ナシ茲ニ於テ本手術ヲナセリ」ト記セリ、尙ホ同志ニ送リシ小冊子中ニ、「冀クバ救世ニ志アル者西醫ノ我ヲ誣ザルヲ知テ疑ヲ存スルコト勿レ此ヲ記シテ以テ同志ニ貽ル」トアリ、以テ當時ニ於ケル氏ノ卓見ニ敬意ヲ表セザルヲ得ズ。

扱テ往時ニ於ケル帝王切開術ノ適應症ハ上述セルガ如シト雖今日最普通ニ行ハル、ハ、(一)狹窄骨盤、(二)前置胎盤、(三)子癰、(四)瘤腫或ハ筋腫等ノ合併、(五)軟部産道ノ高度癆痕狹窄、(六)其他母體疾患ニヨリ急速遂娩ヲ要スル場合本手術ノ行ハル、者ナリ、而シテ余ハ茲ニ述ベントスルハ、尿瘻ニヨリ腔閉鎖術ヲ行ヒ其後妊娠シ之ニ帝王切開術ヲ施セシ例及ビ兩側股關節ノ強直セル者ガ妊娠シ而モ第二回目ノ帝王切開術ヲ施セシ例ナリ。文獻ヲ涉獵スルニ、ワインバウム(Weinbaum)ハ千八百八十四年ニ次ノ例ヲ報告セリ、即チ三十三歳ノ妊婦十年前ニ一回分娩セシコトアリ其際分娩非常ニ困難ニシテ三日間ヲ經テ漸ク之ヲ了リシガ其後尿ノ腔ヨリ利スルヲ發見シタルヲ以テ一年半ノ後腔ヲ縫合スルコト九回術後ハ尿竝ニ月經血液共ニ尿道ヨリ排出シタリト云フワインバウムノ此婦人ヲ診察シタル時ニハ恰モ妊娠末期ニシテ胎兒ハ横位ナリキ腔ヲ檢スルニ觸診視診共ニ細孔ヲモ見出サズ指頭ヲ壓入スルニ僅カニ二浬許迄達シ得ルノミ此ニヨリテ全ク之ヲ尿道ニヨリ受胎シタル者ト認メ帝王切開術ヲ施シタリ、キーデル(Wieder)モ亦千八百八十五年ニ腔閉鎖術後ノ者ガ妊娠セシ例ヲ報告セリ、氏ハ腔口ヲ檢シタルニ纖維質ノ硬固ナル組織ニヨリテ閉鎖セラレ僅ニ一小孔ヲ殘セリ兒頭ハ骨盤ノ出路ニ臨メリ氏ハ麻醉藥ヲ施シ其中隔ヲ切除シ其口ヲ廣メ鉗子ヲ以テ兒ヲ娩出セシメタリ尙ホ仔細ニ檢スルニ尿道擴張シテ二指ヲ通ジ得ベク深く指ヲ挿入シテ探グルニ長橢圓形ヲナセル孔ヲ通ジテ腔ニ達スルコトヲ得、其夫ハ再婚ナルガ故ニ妻ニ斯ノ如キ變狀アルヲ知ラズ尋常ニ交接ノ行ハレタルモノト信ジキタリ氏ハ結論トシ此婦人ノ受胎シタルハ精液尿道ヨリ膀胱ニ入り是ヨリ瘻管ヲ經テ腔ニ至リ遂ニ子宮ニ達シタルモノナル可シ或ハ精液ガ腔ノ閉鎖組織ニ存セル細孔ヲ通ジテ受胎シタルニ非ザルカノ疑アルモ恐ラク然ラザル可シト云ヘリ。次ニ兩側股關節ノ強直アル者ガ妊娠シ之ニ帝王切開術ヲ施セシ例ハ、バツチー [Bazocchi (1914)] フックス [Fuchs, H. (1914)] ホルネス [R. W. Hornes (1905)] バウム [Baum (1913)] アルメルトツィン [Almert Sippel (1906)] 等ノ諸氏ヨリ報告サレ其原因ハ「ロイマチス」結核膿毒性化膿等ナリ、而シテ余ノ例ノ如キハ未ダ本邦ニ於テ報告セラレタルヲ聞カザル故ニ敢テ茲ニ報告セントスル所以ナリ。

先ツ尿瘻ニヨリ腔閉鎖術ヲ行ヒ其後妊娠シ之ニ帝王切開術ヲ施セシ例ヲ述ブ可シ。

(患者姓名) 丹〇千〇乃、三十三歳、農。

(既往症) 遺傳的竝ニ血族の關係トシテ特記ス可キコトナシ、生來健全ニシテ十八歳ニシテ月華開キ、二十五歳ノ時結婚ス、花柳病ハ夫ト共ニ否定シテキマス。

(現症ノ既往經過) 大正六年七月分娩困難ニテ醫師ニヨリ鉗子手術ヲ受ケ其後尿瘻ヲ作り、大正七年一月奮岡山縣病院産婦人科ヲ訪ヒ安藤博士ノ手術ヲ受ケ最後ニ腔外口ヨリ約二種ノ所ニテ腔閉鎖術ヲ施サレタリ退院後月經ハ不順ニシテ二箇月或ハ三箇月ニ一回ノ月經アリ、持續ハ四日位ニシテ少量ナリ時トシテ凝血ノタメ排泄困難ヲ訴ヘシコトアリ、又退院後少量ノ尿腔ヨリ洩ル、コトアリ、殊ニ夜間時トシテ尿失禁ヲ起スコトアリ。

(交接状態) 退院後二箇月位ハ交接不能ナリシモ漸次腔壁ノ延長性ニヨリ腔ノ深サヲ増進シ四箇月後位ニハ殆ト完全ニ遂行シ得ルニ至レリ、而シテ快感ハ手術前ニ比シ少シ、夫ノ快感ハ手術前ト大ナル變化ナシ。

(最終月經) 大正十年二月初旬ニシテ、六月終リ頃ニハ胎動ヲ感シタリ。

(現症) 大正十年十月六日當科ニテ診察セシニ身體矮小ニシテ身長四尺二寸二分體重十五貫九百匁筋肉發育状態及榮養状態可良、皮膚ハ乾燥セルモ異常ナク粘膜ニモ亦貧血状態ヲ見ズ、腺ノ腫脹ナシ、五器官正常、胸腹臓器ニハ理學的變状ヲ認メズ、腹部ハ肚腹状ニ膨大シ中線ノ着色中等度

秋本一稀有ナル適應ノモトニ施セシ帝王切開術實驗二例

臍窩ハ膨出シ新舊妊娠線著明、乳房ハ増大シテ乳暈乳頭ノ着色ハ著シク、モントゴメリー氏腺モ著明ナリ、壓迫ニヨリ初乳ヲ分泌ス。

尿ハ弱酸性ニシテ蛋白、糖及ビ異常成分ヲ認メズ、糞便ニモ蛔蟲卵ノ外寄蟲卵ヲ認メズ。

骨盤ヲ計測スルニ、前上棘間二十三種、櫛間二十六種、大轉子間二十七種、外斜傾線(左右同様二十四種)、外結合線二十種、骨盤周圍八十三種、最大腹圍九十九種、臍上腹圍九十七種ニシテ殆ト異常ナシ。

子宮底ハ劍狀突起下二指橫徑ノ所ニアリ、胎兒ノ背部ハ左側ニアリ、頭部ハ右下方ニテ未ダ十分固定シ居ラズ、胎兒心音ハ左側臍腸骨線ノ中央ニテ著明ニ聽取シ得、次ニ内診所見トシテ、粘膜ハ鬆粗ニシテ且紫紅色ヲ呈セリ、腔外口ヨリ約一種ノ所ニ以前手術セラレシ中隔アリ、其中隔ノ右上方ニ細キ消息子ノ辛シテ通過シ得ル細孔二箇ヲ認ム、而シテ此孔ヨリ時トシテ尿ノ洩ル、ヲ認ム。

(診斷) (一) 妊娠十箇月

(二) 體兒第一體向

(三) 腔閉鎖術後瘻管遺殘

(四) 蛔蟲病

(適應) 本患者ハ尋常ノ骨盤ヲ有ス、然レ共自然產道ヨリ挽出セシメ得ザルコト明カナリ、元來腔部ノ閉鎖セラレタルモノハ腔上部切斷術或ハ

秋本一稀有ナル適應ノモトニ施セシ帝王切開術實驗二例

ポロー氏手術ノ適應症ナランモ本例ニ於テハ陰部ニ細キ瘻管アルヲ以テ惡露ハ是ヨリ排泄セラルナラント推定シタルコト及ヒ本患者ガ偶々施療患者ナリシヲ以テ一面手術後ノ經過ヲ觀察セントシ必要ニ應ジポロー氏手術ヲ試ムルコト、シテ茲ニ定型の帝王切開術ヲナスコトニ決定セリ、尙ホ向後ノ妊娠ヲ豫防スルタメ輸卵管避妊法ヲナスコト、セリ。

(手術記事)

十一月午後一時及ビ二時ノ兩回ニ「ナルコポンスコボラミン」○・五宛ヲ注射セリ、フュールプリンゲル氏法ニヨリ手術野ノ消毒ヲナス、次ニ「トロバコカイン」○・六ヲ用ヒ腰髓麻醉ヲ行ヒ二時半大原教授執刀ノ下ニ手術ヲ開始ス、先ヅ臍ヲ左ニ繞リテ上下ニ約三十浬ニ互ル皮切ヲ入レ漸次ニ腹腔ニ向テ進ム、筋肉竝ニ皮下脂肪組織ノ發育ハ中等度ニシテ腹膜ハ菲薄ニナレリ、腹腔内ニハ増大セル妊娠子宮ヲ有ス、該子宮ト他臓器トノ癒着ナシ、茲ニ於テ子宮ヲ注意シテ腹膜外ニ出スト同時ニ羊水ノ腹腔内ニ流入セザル様竝ニ腸管ノ脱出セザル様ニ「ガーゼ」其他白布ヲ使用セリ、次デ子宮ヲ觸診スルニ胎盤ハ右側後壁ニ附着セルヲ知リタルヲ以テ子宮底ニ約十二浬ノ橫切開ヲ行ヒタリ、卵膜ヲ破綻スルニ多量ノ胎脂ヲ混ゼル稍々黃色透明ナル羊水流出ス、胎兒ハ外診ノ如ク第一體向頭位ナリシ故ニ術者ハ直ニ子宮腔内ニ手ヲ入レ胎兒ノ兩足ヲ把持シテ之ヲ挽出セリ、胎兒ハ二度ノ假死ニ陥リ居タルヲ以テ直ニ臍帶ヲ切斷シ他ノ助手ニヨリ人工蘇生法ヲ行ハシム、子宮ハ胎兒ヲ挽出スルヤ否ヤ著シク收縮セリ、創面ヨリノ出血ハ宮底切開ノ時子宮動脈ヲ壓迫シ居リシ爲メ夥シカラズ、創面ハ腸線ヲ用ヒテ三層縫合ヲナセリ、次ニ人工的避妊法ヲナス爲メ兩側ノ輸卵管ヲ結紮切斷セリ、斯クテ腹壁ヲ三層ニ縫合シタリ、手術時間ハ三十分、手術直後ノ脈搏ハ百内外ニシテ整調強實ナリ。

(胎兒記事)

男性ニシテ挽出後直チニシユルチエ氏振搖法其他種々ノ方法ヲ行ヒシモ蘇生セシメ得ザリシハ遺憾トス。

(術後ノ經過)

大體ニ於テ良好ナリ術後七日ニシテ惡露ノ蓄積シタルカノ徵候アリシモ「ピツイトリン」ノ注射ニ

(入院經過)

入院後體溫脈搏ニ異常ナク食慾モ極メテ可良ニシテ何等苦痛ナシ、蛔蟲ヲ驅除スルタメ六日及ビ八日ノ二回ニ「サントニン」及ビ下劑ヲ與フ、之ニヨリ蛔蟲ハ完全ニ驅除シ得ザリシモ患者ノ希望モアリタレバ十月十一日手術ヲナスコト、セリ。

ヨリ輕快シ惡露ハ尿道竝ニ瘻管ヨリ排泄セラレ食慾其他一般狀態漸次可良トナリ手術後五十三日ニシテ退院セリ。

(受胎徑路) 本例ニ於テ吾人ノ興味トスル所ハ如何ニシテ受胎セラレシヤ換言スレバ精液ノ子宮ニ到達セシ徑路如何ト云フ問題ナリ、ワインバウムノ報告ニヨレバ交接ハ閉鎖後ノ腔或ハ腔前庭ニ於テ遂行サレタリ而シテ腔ハ完全ニ閉鎖セラレ居ルヲ以テ精液ハ尿道ヨリ膀胱ニ至リ腔ト膀胱ト交通セル孔ヨリ腔ニ至リ更ニ子宮ニ到達セルガ如シ又ウイデーデルノ報告ニヨレバ交接ハ尿道及ビ膀胱ニテ行ハレタリ、同氏ノ結論ノ如ク腔閉鎖部ニ細孔アルモ精液ハ膀胱ト腔ト交通セル孔ヲ通りテ子宮ニ到達セシガ如シ、而シテ本例ニ於テハ尿道ニ異常ナク交接ハ不完全ナガラモ腔内ニ於テ行ハレ且中隔ノ一角ニ瘻管アルヨリ思惟スレバ恐ラク精液ハ中隔ニアル小孔ヲ通過シ膀胱ト交通セル換言セバ尿ノ蓄積シ得ル腔ヲ通りテ子宮ニ到達シ受胎セシモノナラン。

次ニ兩側股關節ノ強直アル者ガ妊娠シ而モ第二回目ノ帝王切開術ヲ施セシ例ヲ述ブ可シ。

(患者姓名) 川○ヒ○、三十二歲、官吏妻。

(既往症) 遺傳的竝ニ血族の關係トシテ特記ス可キコトナシ、初潮ハ十九歲、二十五歲ニシテ結婚ス、十六歲ノ時結核性骨膜炎ニ罹リ兩側股關節ノ強直ヲ起セリ、花柳病ハ夫ト共ニ之ヲ否定セリ。

大正六年舊岡山縣病院ニテ腹膜外帝王切開術ヲナス、最終月經ハ二月十五日ヨリ五日間持續シ平常ノ月經ト異常ナシ、六月ノ終リ頃ニハ胎動ヲ自覺ス。

(現症) 大正十年十一月二十四日當科ニテ診察ス、其時ノ所見次ノ如シ、乳房及ビ乳暈ハ色素ノ沈着アリ壓迫ニヨリテ初乳ヲ分泌ス、腹部ニ腹膜外帝王切開術ヲ瘻痕即チ臍下ニ約十四糎ノ縱皮切ノ跡ヲ認ム、兩側股關節ハ癒着シ少シモ移動セズ、下肢ハ上體ト約百四十度ノ角度ヲ以テ前屈

秋本一稀有ナル適應ノモトニ施セシ帝王切開術實驗一例

ノ狀態ニアリ、膝關節ニハ異常ナシ即チ步行ハ膝關節ノ調節ニヨリ徐々ニ營ミ得。宮底ハ劍狀突起下二指橫徑ノ所ニアリ、小部分ハ左側頭部ハ下方

ニアリ未ダ十分固定シ居ラズ、胎兒心音ハ右側臍腸骨線ノ中央ニテ著明ニ聽取シ得。

内診ハ股關節移動セザル故十分ニ行フヲ得ズ、粘膜ハ一般ニ鬆粗ナリ、子宮腔部モ亦鬆粗ナリ、子宮口ハ一指ヲ通シ得ルモ未ダ開大シ居ラズ。子宮鏡ヲ使用シ得ザルヲ以テ視診上ノ所見ヲ記載シ得ズ。

(診斷)

- (一) 兩側股關節強直ヲ伴ヘル妊娠十箇月
- (二) 胎兒ハ第二體(向頭位)

(適應)

兩側股關節ハ少シモ移動セザルヲ以テ之ヲ自然產道ヨリノ

分娩ヲ望ム可ラズ。併シ以前腹膜外帝王切開術ヲセシ時ノ經過ヲ記載ニヨリ見ルニ良好ニミテ暴露ノ著穢セシガ如キコトナシ、故ニ子宮體部ヲ除去シテ定メリ。尙ホ將來ノ妊娠ヲ豫防スルタメ輸卵管避妊法ヲナスコトナセリ。

(手術記事) 大正十年十二月二十五日「ナルコボンヌコボラミン」ノ注射及ビ消毒法ハ前者同様ニナシ腰髓麻酔ノ下ニ大原教授執刀ノモトニ手術ヲナス、術式竝ニ輸卵管避妊法ヲナスコト前者ト同様ナリ。

(胎兒記事) 胎兒ハ第一度ノ假死状態ニアリシガ人工蘇生法效ヲ奏シ、胎兒ハ爾後順調ニ發育セリ。

(經過) 良好ニミテ手術後十六日ニシテ母兒兩者共ニ退院セリ。

(Koitus Methode) Wie verkehrte sie geschlechtlich mit ihrem Manne? Dieser Fall hat uns in diese Frage angezogen. Wie es oben erwähnt ist, leidet die Kranke an Ankylosen beider Hüftgelenke, und die Oberschenkelknochen sind unbeweglich, ausserdem ist sie im Zustande des Vorbeugung von 140 grad; darum ist es ihr unmöglich, von vorn mit ihrem Manne geschlechtlich zu verkehren. Sie konnte nur, wie sie gesagt hat, in Seitenlage ihren Geschlechttrieb erfüllen. Also ist es bewiesen, dass die Ankylosen der beiden Hüftgelenke allein keine Ursache der Unfruchtbarkeit sind.

文 獻

- 1) 廣島醫報 157號 29頁
- 2) 日本産科史 865頁
- 3) 増訂不妊症論 第三版 151頁
- 4) Handbuch der Geburtshulfe F. V. Winkel. III Bd. I. t. 1906, s. 780.
- 5) Monatschr. Geburtsh. u. Gynaekol. Bd. 39, H. 4, s. 477, 1914.
- 6) American Journal of Obstetr. Dezenbar. 1905.
- 7) Zbl. f. Gyn. 1913, s. 861.
- 8) Monatschr. f. Geb. Bd. 24, s. 307.
- 9) ~~Yasuda, Ritsen~~ Wiener Med. Wochenschrift, 1902, Nr. 48.